

淨土

1985—1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 每月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十九年十二月二十五日印刷 昭和六十年一月一日発行
第五十一卷 正月号



招福 三面大黒天尊

小林



「傳 弘」

三上人（二祖聖光上人、三祖良忠上人、知恩院二祖源智上人）
とも、ひとしく法然上人のみ教えを正しく伝え、そのみ
教えを弘められました

浄土門主 藤 井 実 応

傳弘

浄土門主 明三実応



| 正月号 |



仏道を得る時に至りて、普く十方
の諸仏菩薩の為に、其の光明を歎
ぜられむこと、亦いまのごとく不
らむ。

——『無量寿経』光明歎徳章

目 次

＜年頭所感＞

- 牛角ということ……………藤 井 実 応……(2)
- 浄土への道……………中 村 康 隆……(5)
- 極楽に階位はあるのか……………稲 岡 覚 順……(8)
- 牛 年 史 談……………細 田 隆 善……(14)

エッセイ

- 大いなる出会い……………増 田 純 三……(21)

＜読者のページ＞

- 末期医療で考える……………吉 田 勇之助……(26)

◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第7回……………寺 内 大 吉……(30)
- 前章・絶唱の経典 (七)……………挿絵 松濤 達文

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

牛角ということ



浄土門主
総本山知恩院門跡

藤井実応
ふじ い じつ おう

あけましておめでとうございます。

今年は丑歳ということで、年賀状やカレンダーなどにも、牛の絵や写真をあしらったものが多いように見受けられます。

牛は昔から家畜の一として重宝がられ、行動は鈍くても力は強く、田を耕し

たり車をひいたりする使役に黙々と耐えて来ました。その乳や肉が飲食に供され、皮や骨・角なども加工されて各種用具に利用されていることは、みなさんご存じのとおりであります。私は牛に対して感謝したい気持ちがします。

さてこうした牛の特長の中で、特にここで挙げたいのは、均齊のとれたその角の立派さということであります。牛の角は左右二本が、大小、長短、曲り具合など、相対的に寸分違わず揃っています。そこから、物が互いにその力量や外観に優劣の差をもたないことを「牛角」と呼ぶようになり、近頃ではこれを「互角」と表記するようであります。

法然上人は、大原問答で、聖道・浄土両門の別について論じられた時を振り返って、後に、

「法門は牛角の論なりしかども、機根比べには源空勝ちたりき」と述懐されたことで有名であります。

これはいうまでもなく、お念仏の教えが、「時機を叩いて行運に当れる」姿を評価せられたにすぎず、両者が牛の角のように優劣の差別さらになきことを強調されたに他なりません。たとえ別解異学の人を見ても、これをあなどり誇ることを強く誡め、积尊一代の教法にどれ一つとして優劣を論ずべきものがあるはずがない、という信念を堅持されていたからでありましょう。

わたくしは、昨年はスリランカ、ハワイなど仏教有縁の各地を巡教する機会

に恵まれ、その土地の人々の信仰ぶりも垣間見てまいりましたが、どの地域にまいりましても、それぞれ、人種、言語、文化、行法の差こそあれ、釈尊の教えとして三宝を敬い、僧侶を尊ぶ姿勢は、むしろ日本以上のものがあり、その熱烈敬虔な態度は、かえって学ぶべきではないか、と痛感させられました。

とかくわれわれは、大乘相應の地に咲いた日本仏教の華やかな立場から、ややもすれば地道で遺産的な他国の仏教を低く、あるいは未開の相として捉えがちであります。いずれもその土地固有の人心と環境に応じて花開いた釈尊精神の今日的あり方であることを思う時、大いに反省すべきではなからうかと存じます。あくまで「法門は牛角」という認識の下に仏法を見る目を養うべきであります。

両三年後には「三上人大遠忌」もつとまります。三上人の芳躰ほうたうを偲び、これまたそれぞれに牛角の業績であったことに想いを致して評価顕彰すべきであろうと思います。乙丑おつしの新春にちなんで、一言、日頃の所懐の一端を述べた次第であります。

◇
◇
◇
年 頭 所 感
◇
◇
◇

浄土への道

大本山増上寺法主

なかむら
中村 康隆
こうりゅう



この耳は

ふしぎな耳で

テレビの言葉は聞こえにくい

が
何万光年 彼方からの

宇宙のささやきが

人身受け難しと 聞こえてくる

念仏の詩人、榎本栄一老人は詩集『群生海』の中で「遠い耳」と題して詩^{うた}っています。

私も、もう眼も霞み耳も遠くなり歯も抜け落ちた、いわば棺桶に片足つつこんだ年になつてやっと、「人身受け難い」ことを、強い悔恨をもって感ずるようになりました。この年になるまで、もうすぐ日が暮れてしまう今になって、怠慢を重ねつつある己れにあきれ返

っているのです。日の明るい内に、どうして、もっと勉強しなかったのか。励まなかったのか、と。年老いて、漸く道元さんの「耳に見て目で聞くならば疑わじおのずからなる軒の玉水」という歌のように、書かれざる書を読み、記されぬ言葉聞き得る境地に達し得た思いもなくなっているのに、書き話すこともものうい老残の日々を歎いている有様なのです。情ないと思っても身体が思うに任せないのです。

ただ、そうなって、はじめて、出家以後常に求道に明け暮れ、生涯遂に妻帯もせず、ちびれ草履に墨染め姿で通された宗祖上人が、十八歳から四十三歳の春までの二十五年間、黒谷の慈眼房寂空上人の室で、天台止観や恵心の二十五三昧など専ら天台念仏儀を修して、遂に悟得せられず、善導の念仏往生義に帰せられた御心境の一端をかいま見ることの出来た想いを深くしていることです。

御承知のように、宗祖法然上人以前の宗教は皆最上の経典・教理を求めていたことでした。そして仏性・仏心の開発に主眼を置き、即身成仏・見性成仏の現成を願っていました。上人自身、智慧第一と謳われ、持戒堅固・念仏専修・三昧発得の聖と仰がれていたにもかかわらず、求めていたのに戒定慧の三学を極むることもなく、最勝の法・最勝の仏土を求むることもなく、偏に凡夫の浄土に往生することを明かさんとされてのことでした。上人の求めた仏教はすぐれた智者・行人のためのものではなく、罪惡生死の凡夫のすべてが救われる道だったのした。「浄土一宗にこえ、念仏一行の諸行はすぐれたらうということ」は万機を摂するかたをいうなり」といわれました。上人によって始めて悪人正機・女人正機が広く示されたのでした。自ら「しらず地獄八熱のそこにやすみけん。はづべしはづべし」と嘆かれ、「しかるに、わがこの身は、戒行において一戒をもたず、禪定において一

つもこれをえず。……かなしきかなかなしきかな、いかがせんいかがせん。ここに我等ごときは、すでに戒定恵の三学の器にあらず」と恥じられておられるのです。

われわれ人類の慧智は天の月へも行ける文明を齎らしました。商品は巷にあふれ、享樂の商法が軒をつらね、人々はマスプロとマスコミに踊らされて、徒らにフロムのいう「欲望と充足の組織」と化し、欲求過剰と欲求不満に追ひ廻されて、精神と肉体の荒廃に陥っており、到るところで殺戮と抗争と飢餓と罪惡とがあらわにうごめいております。

このようなときに、人間性の高貴を謳うよりも、この愚劣にして罪深き者をも救いたもうみ仏の大悲をたのみ、その救いとお育て、お導きを願って生きる念仏往生の生き方こそが、末世濁惡の世に眞の救いをもたらす教えであらうと存じます。

禪と密教のブームが去った後に、究極の仏教として浄土教が人々の心を捕えるようになることと存じます。それは智慧を磨く道でもなく悟りを開く行でもありません。愚にして愚、鈍にして鈍なる私の救われる道なのです。白道一路、ただ極樂に還る日まで、お念仏の中に生かして頂く外はないであります。年頭の反省を、最後にまた榎本老人の詩でしめくりましょう。

浄土をねがって

ゆく道中が かたじけない

石ころの道も

山坂も

道ばたに咲く花も

(娑婆をゆく『光明土』)

◇◇◇年頭所感◇◇◇

極楽に階位はあるのか

大本山金戒光明寺法主

稲岡覚順
いな おか かく じゆん

「極楽に階位はあるのか」の問題を提起して大方の教示を仰ぎたい。

一 先ず私の極楽観

問題提起の前に、先づ私の「極楽観」を申し上げたい。

極楽に階位はある筈がない。

勝劣もない。往生の遅速もない。

その国には貴賤貧富もない。その国の人々（極楽の聖衆）は阿弥陀様のみのちに随順し、もちつもたれつ、歡喜奉行（喜び働く）の同行者である。

極楽は「在る」世界ではない。北緯何度、東経何度の、有限個在の国ではない。浄土は生きている国であり、完全調和の大生命の世界である。



その国は「浄まった世界」ではなく、「浄めてゆく世界」である。

不断に進歩し、刻々清められてゆく国である。

法蔵菩薩の衆生済度の悲願に発し、兆戴永劫の御修行に酬いた、四十八願成就の報身報土であつたからである。

如来の願力により、一念十念で往生が許され、無量寿無量光に生かされる国だからである。

二 觀經、壽經の所説への疑念

こんな「極楽觀」に生きる私の前には、觀經や壽經の所説の中には色々の疑念が湧く。

本より愚かな私の謬見ではあるが、一応それ等の疑念を挙げ、然る後私なりの納得の程を述べて見たい。

疑念の一つ――

觀經の散善（三福九品）、壽經の三輩の中には多くの徳目があげられている。

孝養父母 奉持師長 慈心不殺 修十善業

受持三帰 具足衆戒 不犯威儀 發菩提心

深信因果 誦誦大乘（三福）

捨家棄欲 作沙門 發無上菩提心（三輩）

等であるが本願に乗じて往生を願う凡夫に、この様な諸行の羅列がどうして必要であらう。

疑念の二つ――

得生の際の仏の來現にも差別がある。

上輩の場合は仏自ら來現し、中輩の場合は化仏化觀世音であり、三輩が不同である。

疑念の三つ――

九品往生には得生の遲速がめだつ。

上品では「彈指の頃」「一念の頃」とあるが、中品以下の往生者の蓮花の開く時期は、七七七経て（中品上生）、六劫を経て（下品中生）、十二大劫を満じて（下品下生）とあるのはどうしたことであろう。

疑念の四つ――

念仏の多少により極楽に階位がある。

選択集第五章段には、

「觀念法門に言わく、あるいは三万六万十万を得る者はみなこれ上品上生の人なり。まさに知るべし。三万以上はこれ上品上生の業、三万已去は上品已下の業なり。すでに念仏の多少に随つて品位を分別することを明かす」とある。これをどう理解すべきであろう。

三 私なりの理解

三輩の文には諸行を挙げてはいるが、仔細に見れば末尾には、それぞれ「一向專念無量壽仏」としてある。従つて行者の機根によって徳目は課してあるが、本願行たる念仏は無視されてはいない。

又壽經流通分には、

「それ彼の仏の名号を聞き、觀喜踊躍して乃至一念せんに當に知るべし。此の人は大

利を得たりとす。則ちこれ無上の功德なり」

とあるの外、觀經末尾の念仏付屬みぞくの段では、

「汝よくこの語ことばを持て、この語ことばを持てとは即ち無量寿仏のみ名なを持てとなり」

とあるによつても、諸行は結局捨てて省みず、ただ本願行たる念仏のみを優先優先されている事実が知られる。

従つて私の今提起した幾つかの疑念の如きは、総て釈尊の巧言うづげん即ち凡夫に對する深いお計らいに発した諸方便であつたと理解する事が出来る。

されば善導大師も觀經疏において、

「上來定散じやうさん兩門の益やくを説くと雖も、仏の本願に望むれば、意は衆生をして一向に専ら

と結んでおられることによつて明らかである。

四 服部英淳勸学の所説

私の提起した幾つかの疑問に關連して、畏友服部英淳觀學は傾聴すべき所見を、次の如く述べておられる。

善導大師にすれば散心の凡夫には、五迷十惡の極重惡人も居るし、本願の行ではないが施福せふく戒福かいふく行福ぎやうふくを含めて、發菩提心はつぼだいしん等の善業を修する積善の人もあることは当然である。そこでこれに對應して、淨土の三業に各々上中下の三生を分ち、上品上生乃至下品下生の九品の淨土の差別を説かれたと言っている。

宗祖上人も「醍醐本法然上人伝記」によると、禪勝房の問に答えて、

「問うて言わく、極楽の九品の差別のあることは弥陀の本願の構とすべきか。

答えて曰く、極楽の九品は弥陀の本願にあらず、更に四十八願になし、是れ釈尊の巧言なり。若し善人と悪人と一所に生ずと説かば悪業の者は等慢心を起すべきか。

故に品位をして差別あらしめ、善人は上品に進み、悪人は下品に下ると説くなり。

急ぎ参りて見るべし」

と説明しておられる。「ともかくも本願称名の念仏によって、急ぎ参りて見る事が、散善三観の真意である」(浄土教思想論)と述べられる。

右の所見によって私の疑念も雲散霧消した訳であるが、この所見の中に出てくる「釈尊の巧言なり」「急ぎ参りて見るべし」の二句に千金の重みを感じる。

五 釈尊の巧言

釈尊の「巧言」とは「善巧方便ぜんごうほうべん」とも言われ、お釈迦様の凡夫たるわれ等に対する深い御配慮に基く御方便であると解するのである。

およそ宗教上の教義や伝承の中には、合理主義に生きる現代人には、索強附会けんきょうふかいとも思われる説話や、科学的検証の世界では納得し難い神秘的の要素を伴うものである。

そしてこれは宗教的廻心、即ち信仰によって納得させ信順をせまる部分であり、これが宗教伝承上の根幹ともなり、一宗の秘義として君臨することもある。

わが宗の「二祖対面にそたいめん」の伝承や「指方立相しほうりつそう」の問題等もそれであって、これが釈尊の「善巧方便」として納得され、尊信されているのである。「指方立相」の問題は、今の問題即ち「極楽の階位」とはやや枠外にあるが、釈尊の善巧方便の好例であるから、一寸触

れさせて頂く。

「指方立相」とは極楽の方位を西方とし、そこに依正二報えしやうにほうの結構を説く、本宗の基本思想である。

「十方に浄土多けれど」と申される様に、浄土は西方でなくてもよいのであるが、特に西方に定めたのは、釈尊の善巧方便によるものであった。

即ち善導大師は

「凡夫には抽象的に説いても駄目だ。それは通力つうりき（神通力）のない者に空中に家を建てさせる様なものである。だから方便として極楽の方位を西方と定め、極楽の莊嚴も具體的に示されたのである」と申されている。

赫々たる夕陽が沈まんとする西方を仰ぎ、浄土を偲び、人生の帰趨を考え、如来の願力の尊さを頂かしめるのである。

釈尊のお計い通り、極楽は矢張り西方に限る。

六 「急ぎ参りて見るべし」の金言

こざかしい智慧や才覚が何になる。一重に本願を信じ念仏することだ。一念十念で往生の大利が保証されている。急ぎ浄土に参らせて頂いた瞬間、一切の疑念や妄念は解消してひたすら弥陀の慈光に生かされてゆく。

「急ぎ参りて見るべし」の金言。誠に有難きかなである。

牛年史談



昭和六十年は干支みづえの上から乙丑おつしの年にあたりますので牛の年といえます。西暦は一九八五年、明治以来百十八年の年です。丑は十二支では二番目、方位の上から北々東を指し、時刻では午前二時又は午前一時から三時までの二時間を表します。牛は古代から多産、豊稷、繁栄を象徴するめでたい動物とされてき

ました。

牛は日本語で宇之うし、ウシ、韓語でソ、シヨウ、インド語でウクシヤ、アイヌ語でベコ、東北地方でもベコ、ラテン語でベクスといえます。牛の文字は牛の正面の頭部を象形文字化して出来ました。

牛は家畜の中でもっとも古くから飼われた

細田隆善

(東京・江東区勢至院住職
号豊明)

動物です。牛の先祖の原牛は野牛とともに氷河時代から人類が狩猟した動物であります。

この野生の牛を家畜化し牧畜化した時代はきわめて古く、紀元前五千年のころ古代オリエントのメソポタミアでは原始農耕時代に牛を使用しました。紀元前三千年のころ中近東方面において牛を農耕運搬に使用するだけでなく、牛乳牛肉が重要な食糧資源として広く活用されるようになりました。とくに牛肉は美味であるので牛の牧畜化は世界に広がっていききました。インドでは牛は古くから農耕に使用され、インド教徒ではシバ神の乗物として尊重し、牛を食肉用に供しませんでした。ところが回教徒は牛を食用としますので、両教の争いの原因となり現在に及んでいます。中国では紀元前二千年のころから牛は農耕用、食肉用として重要な家畜となりました。

日本の牛は大陸から伝来したもので、石器時代の貝塚かいづかの中に牛の骨は発見されています。ごくまれに弥生時代やよいの遺跡に牛の骨が出

土しました。耶馬台国やまたいのことを記した最古の文献、中国の魏志倭人伝ぎしわじんでんに「そこに牛馬なし」と記し、牛や馬は飼われていないと記載されています。牛の家畜化の伝来は古墳時代といわれています。橿原市の北、羽子田古墳から牛の埴輪はにわが発見され国立博物館に保存されています。続日本紀によると和銅六年（七二三）山背国やまきの乳牛戸を五十戸置くことあって、牛の家畜化がすんだことを示し、延喜式えんぎしき（九二七）によると牛の官営牧場が全国に三十九カ所あると記るされ、牛の飼育の普及してきたことがわかります。牛は農耕運搬用として重要な家畜となりましたが、仏教の伝来とともに牛を食肉用には供しませんでした。孝徳天皇記には牛肉は食さないが、牛乳は飲用することが記されています。

平安時代朝廷において大寒の前後に、土牛や童子の像を内裏ないりに立て、立春の前夜に撤去する行事があり、追儺ついなの源流といわれています。これは中国において牛を穀神こくしんとしたこと



——牛に乗った閻魔天像——

(国宝・京都醍醐寺蔵)

に由来します。

菅原道真公を祭神とする天神社には牛の像が置かれ祭礼には鳳輦を牛が曳きます。これは道真公が承和十二年(八四五)乙丑の年の生れであり、延喜元年(九〇二)九州筑紫の配所に向うとき牛に乗られたからです。翌々年逝

去の際、棺を牛が曳いたからです。

俳句の季題である牛祭りは、京都広隆寺において、毎年十月十二日の夜に行われる奇祭です。牛と摩多羅神とを祭り摩多羅神が牛に乗り、四方に赤鬼青鬼が立ちほだかり、摩多羅神が祭文を読み、堂内に鬼とともに馳け込

むと、村人が祭文を奉うため揉み合う祭であ
って、一種の収獲祭であります。

角文字のいざ月もよし牛祭 与謝蕪村

松明や牛に乗りたる摩多羅神 中川四明

仏教には牛に關係のある仏神があります。

牛頭天王は牛に乗り又は頭上に牛を置き、天

王社の祭神です。とくに京都祇園の八坂神社

の祭神として有名です。もとはインドの祇園

精舎の守護神でした。明治初年神仏分離のと

き須佐之男命に改められました。又薬師如来

の十二神将の招杜羅大将是頭上に牛を置き丑

の神といひます。牛に乗る仏神として閻魔天

があります。閻魔は古代インドの神話の中に

あり、死の象徴から冥界の王、地獄の王とな

り、仏教の中にとり入れられて十王の中心と

なり、又十二天の一つとして護法の仏神とな

りました。京都醍醐寺の閻魔天像では女神の

姿をし、新画風の国宝の画像です。大威徳明

王は五大明王の一つで、忿怒神であり、牛に

乗り阿弥陀如来の所変といわれ、西方を護り

人々を悪害から守る仏神です。大自在天はイ
ンド教のシバ神の異名といわれ、白牛に乗っ
ています。大自在天の分身といわれる伊舎那
天も牛に乗っています。風天も牛に乗り、十
二天の一つ、西北の守護神です。

牛合せは角と角とを突き合い、勝敗を決す
る闘牛であります。鎌倉時代から盛んとなり
とくに関西地方に広く行われてきました。

牛の歌は万葉集、古今集、新古今集など、

見当りませんが、扶木和歌抄には出ていま

す。当時牛は農耕運搬用とくに高位高官の者

又は高僧たちに牛車が特別許されました。歌

人であり、天台座主であり、愚管抄の著者で

有名な慈円(慈鎮)は、建保六年(一二二八)

牛車に乗ることを許され、つぎの牛の歌があ

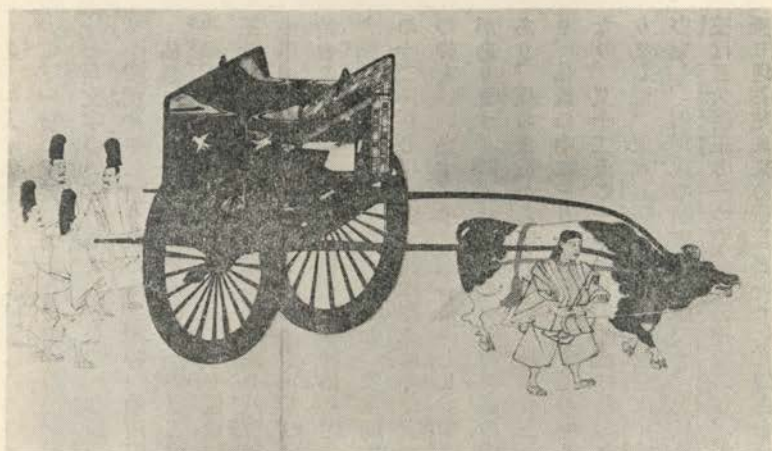
ります。

冬のきてはむものもなきうしの子の

やせ行く里のころのさびしさ 慈鎮

また扶木和歌抄に、土御門院の牛の御製が

あります。



——法然上人絵伝巻二——（国宝・京都知恩院蔵）

此比このよのしつか田かやすからすきの

うしと思ふもちからなのよや

土御門院

牛車は最高級の乗物でした。知恩院所蔵の
 国宝法然上人絵伝巻二に、「上洛じやうらくの勢至せし、路上
 にて法性寺摂政ほつしょうじに会う」場面があります。
 十五歳の勢至丸（法然上人）さまが久安三年
 （一二四七）二月十三日はじめて京都に上り、
 摂政の行列に遇い馬から降りて路傍で迎えら
 れる図がありますが、延々と華麗な行列が美
 事に画かれ、その行列に三台の豪華な牛車が
 描写されています。平安時代の風俗を偲ぶ上
 からも貴重な絵伝であります。

戦国時代から江戸時代初期まで牛裂うしぎという
 刑罰がありました。罪人の片足つづを二頭の
 牛に結び反対方向に歩かせて身体を引き裂く
 死刑、キリンタン弾圧のため大阪堺さかいで執行し
 たのを最後に、あまりに残酷ですので廃止さ
 れました。

昔、丑うしの刻参りときまいという俗信がありました。

対手を呪い殺そうとする女性が、丑の刻午前二時ごろ、白装束に髪を垂れ下げ、高下駄をはき、頭に鉄輪てつりんを乗せて、それに三本の蠟燭を立てて火を点し、口には両端に火を点した松明をくわえ、鏡を胸に下げ、対手を表徴する薬人形を持参して、神木にこれを打ちつけるというものです。七日満願の日に呪う対手が死ぬという呪咀じゆそです。その間人に見られると効果がなくなるので、真夜中の丑の刻に行われたといひます。

夏の土用の丑の日に鰻うなぎを食べると、夏瘦なつせうをしないという習俗は江戸時代から盛んになりました。

丑の日の煙窓より昇天す 五所平之助
牛を吟じた芭蕉の句は四句あります。

此梅に牛も初音と啼つべし 芭蕉
誰が聲こゑぞ齒菜しだいなに餅おふうしの年 芭蕉

さとのこよ梅をりのこせうしのむち

牛部べやに蚊の声聞き残暑哉

芭蕉 芭蕉

夏暑い時に、川で牛を洗うことは俳句の季語になっています。

牛うし浸ひけて川幅なせり鶴見川 水原秋桜子
明治時代新短歌新俳句を鼓吹した正岡子規に牛の短歌と俳句があります。明治になって牛肉を食べることが流行、病身の子規には栄養をつけるため必要であったと思われれます。

八千巻の書ふま読み尽きて蚊の如く

瘦す瘦す生ける君牛を喰へ 子規

牛喰へと勧むる人や冬籠 子規

子規の指導を受け近代短歌興隆に尽した伊藤左千夫に牛飼の歌があります。左千夫は東京錦糸町駅前において、乳牛を飼いながら歌壇の伸展につとめました。

牛飼が歌詠む時に世の中の

あらたしき歌大いに起る 左千夫

牛年生れの人の生涯守り本尊として虚空蔵菩薩が信仰されてきました。とくに虚空蔵菩薩の安置してある寺への正月詣でが盛んでした。昔は十三歳になった娘さんが虚空蔵詣で

をし、初虚空蔵はつこくざうという俳句の季題になっています。

結綿ゆいわたの娘の淑とやかに初虚空蔵

豊明

天神社へ初詣ですることを俳句の季題で天神といひます。天神社にはその神使である牛の置物が梅の木の下に置かれています。青銅なの撫で牛が置かれています。あります。自分の体の悪い箇所と同じ撫で牛の箇所を撫でるとよくなるという俗信です。撫で牛の頭だけがピカピカに光っているのは、天神さまが学問の神、受験の神であるからでしょう。

撫で牛の顔撫で光る初天神

豊明

牛の郷土玩具はいろいろあります。一番有名なのは福島会津の赤ベコと岩手花巻の金ベコです。長野善光寺には張り子の牛とわら製の布引牛ぬいひきが知られています。俵牛はつうは東北各地で作られてきました。四国の横綱牛、岡山の吉備牛きびも有名です。

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主であられます一田牛畝先生も大変にはりきっておられますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

〒839―11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一田牛畝先生宛

〒812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1―11―6

法然上人讃仰会

大いなる出会い



増田純三
だまし だましゆん ぞう

(大阪府岸和田市在住)

わたしたちは毎日、いろいろの人に沢山会います。電車やバスに乗れば、隣りに坐った人と触れ合います。見も知らぬ行きずりの人で、五分から十分隣り合せて、別れば永久に会うこともありません。また、会おうと思っても会えるものでもありません。

「袖すり合うも他生の縁」と申しますが、往來での行きちがい、袖が触れ合うのも、他生つまり前世で何かの因縁があったからでしょう。

このように、人と人とは仲々に出会うことはむづかしいものです。茶道では「一期一会」という

ことをいいます。茶会などで出会って人々に、この茶会が済めば永久に会うことができぬという気持ちでお互いに悔いのないようにもてなすことをいうのです。

お経の中にも、

無上甚深微妙の法は

百千万劫にもあいがたし

という文句があります。「百千万劫」の劫というのはインドの時間の長さです。一劫というのは、四十里四方の岩の上に天女が三年に一度おりて来て、着ている羽衣の裾でサツと岩を撫でて行き、

そのために岩がスリへってなくなるまでの時間をいうのです。これだけでも気が遠くなるように長い時間ですが、それが百千万劫というと全く想像に絶する永久の時間です。仏教のありがたい教えは、それだけの長い時間をかけても会うことがむづかしい。その会いたい仏教の教えに、いま、会ったのだから、これほどありがたいことはないのです。

わたしたちはふだん「ありがとう」とよくいいます。「ありがとう」というのは「めったにない」ということです。「有ることがむづかしい」ことなのです。わたしたちが仏教、特に法然上人の教えであるお念仏に会うことも「ありがたい」ことなのです。

大体、わたしたちが、今日ここに生きていることが、すでに「ありがたい」ことなのです。

わたしたちは、アメリカ人でもなければ、中国人でもない、アフリカの土人でもない立派な日本人です。はるか昔の人間でもなければ、徳川時代の人間でもない、昭和六十年に今生きている現代

人です。また、宗教にはいろいろと宗教があります。キリスト教、神道、マホメット教、その他無数の宗教がありますが、わたしたちは仏教徒です。しかもまた沢山の宗派に分れている仏教の中でもお念仏の浄土宗であります。沢山の人種の中で、長い人間の歴史の中で、無数にある宗教の中で多くの宗派の中で、日本人として現代に生きて、浄土宗に出会うということは、それこそ百千万劫の長い時間の中で、二度ないことなのであります。

それですから、仏教では「出会い」ということを大切にします。会うということはめったにないことです。また自分勝手に会うこともできません。すべては宇宙全体の大きな仕組の中で、会うべくして会うように定められているのです。ですから、出会ったときこそ大切にしなければなりません。先程申しました茶道の一期一会がこのことを教えております。

こうして、わたしたちの日常の世界においても

「出会い」ということは「ありがたい」ことなのです。

ところが、もっとも「ありがたい」大変な出会いがあったのです。それは今から八百年ほど前の鎌倉時代に、法然上人と中国の善導大師とが会われたという、かの「大いなる出会い」なのです。法然上人と善導大師の出会いといっても、お二人が出会われたといった簡単なことではないのです。

なぜなら、善導大師は法然上人より五百年も前に亡くなっておられるし、しかも、中国の方だったのです。ですから時間的には五百年、空間的には日本と中国と数千里の隔たりがあったのです。そのお二人が出会われたのですから、これは平凡な出会いではありません。——それでは、どうして出会われたのかと申しますと「夢」の中で出会われたのであります。

何だ、夢なのかと思われるかも知れませんが、夢といっても凡俗のわたしたちが毎夜見るような

つまらぬ夢ではないのです。夢は五臓六腑の疲れからみるといわれますが、それはわたしたちのみる夢のことです。ところが仏教などの信仰の世界でみる夢は「霊夢」といって、ただの夢ではないのです。釈尊の母マハーマヤは六本の牙を持つ白象が自分のお腹に入る夢をみて、釈尊を懐妊したといわれます。法然上人のお母さんは、カミソリを吞む夢を見て、カミソリのように鋭い智慧を持った法然上人をお生みになったのです。心の奥深く、全心全霊を傾けてみる夢なのです。

法然上人が今から八百年ほど前、浄土宗をお開きになったのは、善導大師のお書きになった観經疏という本の中の一文、すなわち、

「一心に弥陀の名号を唱え行住坐臥、いついかなる時も絶え間なく念仏すれば必ず往生が出来る」

ということをもとにしたのです。それまでに、法然上人は数千巻もある大藏經を読まれ、觀經疏は八回も精読されました。その結果、始めてその精髓を発見されたのです。したがって法然上人は善

導大師を釈尊の生れかわりとし、書かれた観経疏を釈尊がお説きになったものとして尊んだのです。

「私はひたすら善導大師におまかせする……」
とっておられるように、全心全霊をこめて善導大師に傾倒されていたのです。

そのような心の状態にあるとき、法然上人は善導大師と夢のなかで出会われたのでした。法然上人の伝記の中にそのときの有様を次のように描いています。

「上人ある夜夢を見らく。一の大山あり、その峰極めて高し南北長遠にして西方にむかえり。山のふもとに大河あり。碧水北より出でて波浪南に流る。河原湘々として辺際なく林樹花々として限数をしらず。山の腹にのぼりて遙かに西方を見たまえば地よりかみ五丈ばかりあがりて空中に一聚の紫雲あり。この雲とび来りて上人のところにいたる。……(中略)……雲の中より一人の僧出で、上人の所に来たり住す。そのさま、腰より下は金色にして、こしよりかみは墨染なり。上人合掌低頭し

て申したまわく「これ誰人にましますぞや」と。僧答えたまわく「我はこれ善導なり」と。「なにのために、来りたまうぞや」と申たまうに、「汝専修念仏をひろむること貴きがゆえに來たれるなり」とのたまうと見て、夢さめぬ」と。

「あなたは一体どなたなのですか」と問うに答えて、

「私は中国の善導である」

「どうしてここへおいでになったのですか」

「あなたが、念仏を一心に唱えることを大ぜいの人々に教えていることが、大変尊いことなので、感謝の意味をこめてやって來たのです」と答えられています。しかし、これはただ単に感謝のためばかりではありません。もっと大切な意味があるので。

仏教によらず多くの宗教では「伝統」ということを重んじます。教えの流れがずっと絶え間なくつづくことが大切なのです。念仏の教えも、古くは釈尊から始まって、中国に流れ込み、善導大師にまで至ったのです。ところが、先にも述べまし

たように、日本で法然上人が念仏の教えを広めるまで、五百年の間、念仏の流れが途切れた形になってしまいました。また法然上人は、現実にも日本の国から一步も外へ出ておられません。中国へもむろんおいでになっておりません。ですから、形の上では念仏の流れは善導大師と法然上人の間で途切れてしまったことになるわけです。法然上人はそれまで、ただ書物の上でだけ善導大師を知っていたわけでした。それでは、伝統を重んずる仏教の宗派としては完全なものとはいえません。何としてでもお二人は会わなければならなかったわけです。

それが、夢の中で立派に果たされたのでした。上半身は墨染のころもで、下半身は金色に輝く善導大師に会われたのです。ですから、これは夢であって夢ではないのです。見るべくして見た夢です。会うべくして会われたのです。そして、途切れていた念仏の流れは、五百年の時間と数千キロの空間を一瞬の間にちぢめて、滔々として今日にまで流れつづけて来たのです。

お二人の出会いはいは、このように尊く、そして偉大な出会いなのです。

わたしたちが今日、お念仏の流れの中に身を浸して、喜びの生活を送ることのできるのも、まったく、このお二人の「出会い」があつたればこのことでもあります。

そして、わたしたちが、今日、現に、この身を受けて生きていられることは、まさに千載一遇のありがたいことといわなければなりません。

したがって、今、この一瞬を大切にし、一度去つては再び永劫、かえってこないいろいろな出会いを大切にすること、これがわたしたち、お念仏に生きるもののつとめではないでしょうか。

幸い、尊いいのちの流れにのって、今に会うことのできたことを、「ありがたく」うけとって、日々のお念仏生活の中で悔いのない時を送ることにいたしましょう。

末期医療で考える



「自然を征服する」とか「死ぬ権利がある」とかいうような言葉を耳にすると、驕慢さというかなんとも好ましくなさる感じを受ける。

ある講演会で講演者の先生が引用された本の箇所にも、「……現代は死を忘れていく時代……」というのがあった。老老になっていくわたしも同じ思いがして印象が深かった。

古い仏典の中で、「……古ぼけた車が革紐の助けによつてやっと動いて行くように、恐らくわたしの体も革紐

よし
田 勇之助

の助けによつてもっているのだ」というのや、「……疲れた、横になりたい、あのサーラの樹の下に床を敷いてもらいたい……」と申された釈尊のお言葉に接する。ご老衰とご病苦によるものだ。そして又、二人のすぐれたお弟子が相ついで逝かれた時の師のお悲しみ、お淋しさは深く限らないもので、老いや死はつらく、苦しく、好ましくないものであることをしみじみお感じになられていることがうかがえる。

死ぬ時は身心に苦痛なく死んでいけるものとはきまつ

ていない。安楽死とかボックリ往生という願いがあつたのをみてわかる。それは難かしい願いだからである。

最近、死の判定について「脳死」と「心臓死」のことが問題になっている。脳死と判定されたからとて、心臓がまだ動いている間に臓器が移植された話を聞いた時、おそろしくなった。いくら生きのよい臓器が必要でも、これではどうかと思う。

回復不可能なガン系統等の難病に苦しんでいる患者が己れの病名を知った時の驚きと絶望感は想像出来ない程深刻であらう。

手術後の生命残存期間が予測されるし、又その期間が短くなるにつれ、患者の焦燥感が増大する。患者に断続的に襲ってくる激痛を先づ抑えるため鎮痛処置をとってもらいたい。延命療法優先という医の倫理には悖るかもしれないが。

現代の医療で難病患者の生命をたとえ少しでも延ばし得たとて、病める患者の心を救うのは容易なことではない。英米に数多くあるようなホスピス医療がわが国にも出てくるのが願わしい。

死期が予測されている患者の心身を少しでも楽な状態

にするためにも医療にたづさわりの患者をみとめる方々が持つておられるであろう正しい信仰と死生観は、ホスピス医療により影響をもたらすであらう。

「日本は宗教の博覧会である」とか、「日本人の宗教は雑居的で、いろいろの新興宗教があつて、夫々が独善的である……」と観察されているだけに、患者には和やかな表情、静かな受け答えで接し、お説教じみたことは一切口にせず、暖かくみとるゆきとどいた心づかいが大切だと思ふ。短かくなつてきている人生でも終りまで精一杯生きぬけるようなホスピス医療の施設、環境であつてほしい。

長い病床や難病の人が正しい宗教の信仰を持っているのは、人間的に実にすばらしい。私は自分の前に立ちのびだかっている死に対する恐怖を今だに乗り越えられない。何故なのであらうか。真理に対して無知であり、驕慢である故と思ふ。

法然上人のご遺訓のうちから、「智者のふるまいをせずして只一向に念仏すべし」をいただく。

浄土句集

一田牛畝選

評 神の朱の橋が水にうっている。橋は参詣者で雑踏していますが、池は静かに澄み渡っています。

お地藏のお顔をすめて紅葉散る
群馬 島津 か寿

歩道行く無為の思索や桐一葉
東京 安居 瑣樹

千年の塔に人なく冬立ちぬ
京都 岩井 伏水

秋日和過ぎ行く刻の惜しまるる
福岡 荒牧 還愚

老農婦里芋の葉に隠れけり
東京 吉田ゆきゑ

阿武隈の中州の濃ゆき草紅葉
福岡 秋葉 淳

冬ぬくし舟板名号の由米聞く
福岡 小川澤々子

評 善導大師の御像が博多の港につかれる前に玄海灘が大荒れになった時に、大師が舟板一枚はぎ取って名号を書かれ、舸子達と共に念仏の声諸共に海に投ぜられますと嵐も止みました。その名号の舟板の由来を大本山善導寺で聴聞し、心も冬ぬくなったとのことであります。

木枯を背にし重衡卿の墓
東京 真野 竜

評 東大寺大仏殿を焼打した清盛の孫の重衡は、捕えられて最後に法然上人の説法を聴聞して首を討たれました。その墓は

後や先露の命と思へども
熊本 山崎 石庭

評 世は無常で、後や先は全く不明であります。生けらは念仏の功積り死なば浄土に参りなんであることをつくづく。

ボチ今日も戻らぬ小屋や夕時雨
広島 皆本浅茅路

評 夕時雨となった。犬は今日も戻らぬ。安否は如何にと心配であります。

神の橋朱も鮮やかに水澄めり
福岡 服部 光代

山梨 青山富貴江

一服のお茶に朝日の爽やかに

東京 栗原やえ子
秋の夜の夢ともつかずうつとも

東京 真野よし子
秋の日の独り留守居の小句楽し

静岡 魚尾 芳子

数珠くりの隙間なかりし十夜かな

東京 末常てる子
秋天下山門高く樹々高し

東京 吉原登起子
陽をうけて色めき深かし草紅葉

山形 松田 允子

仏飯を小高く盛りし豊の秋

東京 田中 秀代
猿沢の水面にうつる初紅葉

山口 上野 明達
位牌堂改築終へて十夜かな

熊本 山崎 松子

天高しお産の肥立よき嫁に

福岡 上滝津弥音
秋彼岸満座の御堂こぼれ銭

山形 松田 光馨
豊作や古農具ならべ資料館

福岡 原 敬二郎

空港の売店夢の実も売りに

福岡 権藤みきを
大歩危の秋夕闇に沈みけり

山口 三井 寛静
白檀の古木に苔や島十夜

福岡 安藤平次朗

筑紫野に無月の宵のふかまれり

福岡 荒牧 亀齡
石段の手摺に縋り彼岸婆

福岡 行正 明弘
稲雀電巻のごと湧き上る

福岡 行正一如子

朝寒や香炉の炭に手をかざす

東京 小笠原香祥
山合ひの鄙びし里の柿の秋

福岡 前田 秀峰
春めくや刻を忘れて松山城

長野 友洲旋風子

山霧の晴れて朝日の甦える

東京 猪瀬 幸子
ひねもすの障子の影絵みて臥せり

一田 牛畝
境内で七草摘ふ御本山

し、敬虔な仏弟子となったはずである。しかしマトナ師はその敬虔さが見せかけだった、と反証をあげた。

「迦葉尊者が王舎城の結集を決意したのもあのスバッタが原因だった、と回想記で書いておる。迦葉尊者は釈尊危篤の報を得てクシナラーの沙羅双樹林へ急いだ。その途中、スバッタと出会ったのだ」

スバッタは心安げに迦葉に話かけてきた。釈尊はすでに七日前、入滅した、と告げた。そのあと、もう私も仏弟子は窮屈な思いをしないでも済む。自由に釈尊の教えをひろめ教団を拡大させようではないか、と不遜な言葉をついた。

「だいたいあの男はジャイナ教の修法者なのだ。マツラ族にはその信奉者が多い。スバッタのねらいは、このジャイナ教と仏法とな折衷させて自分が教祖になろうとたくらんでいる。入滅された仏陀の遺体をいじくりまわしたり、おみ足を洗ったりさせたのも、すべて

スバッタがやらせたことだ。迦葉尊者はびんとときて、これは正しい仏法をまともにおかぬと、どんなにゆがめられるか、わかったものではない。そのための王舎城結集であった。だから結集の折、阿難はみんなから涅槃時における数々の過失を責められたのだ」

「すると、釈尊のお涅槃は決して安らかなお姿ではなかったのですね」

サビヤは悲しげに問いかえさずにはおれなかった。幼い日から聞かされた善男善女たちは言わずもがな、獣や鳥たちまでが嘆き悲しんだ涅槃図が黒い汚点で犯されたということになる。

「むろん釈尊ご自身には何の迷いも乱れもなかったであろう。ただ灰身減智の御遺骸は、散々だったと思われる」

「灰身減智……」

「小乗派の連中は、涅槃をそうきめこんでいる。身は灰となり、大聖の智はすでに滅び尽きたとな。にもかかわらず、仏舍利を有難が

つて祈って祀ってきた。大乘の立場はそれと異なる」

「どう異なるのですか」

「釈尊の法身は永劫に生き続けるのだ。遺骸の遺骨はどうなってもかまわない。法を説かれ、法が全身にしみこまれた釈尊そのものは滅びないのだ」

「仏となって……」

「そうだ。阿弥陀仏の限らない光明のなかへ溶けこまれ、永遠にわれわれを照らし給うのだ」

「阿弥陀仏への信仰も、じつは釈尊のそうした涅槃相があつてこそ大乘仏教のなかで花開いたのですね」

「そうだとわたしは信ずる。お涅槃が完全無欠であつたならば、釈尊だけをあがめ続けられよい。現に小乗派の連中は、そうきめこんでいる。しかし違うのだ。南伝にしる北伝にしる涅槃経はどちらも涅槃時に「何かがあつた」とほのめかしている。「何かがあつた」

からこそ、あの釈尊をまで摂取する阿弥陀仏の大慈悲が必要になつてきたのではないか」

「悪はこの世から滅び去らないのですね」

「滅び去らない。一切衆生、悉有仏性と説くその仏性という善があまねく実在するのと同質同量に悪もまたこの世に実在し続けるのだ。この世だけではない。この世に生きる人間すべての心に、仏性と悪意とは共存しているのだ」

そこでマトナ師は、窟房の上隅にひらいた小穴の窓へ視線をやった。

「サビヤよ。今朝は珍らしく太陽が強く照りつけている。外へ出よう」

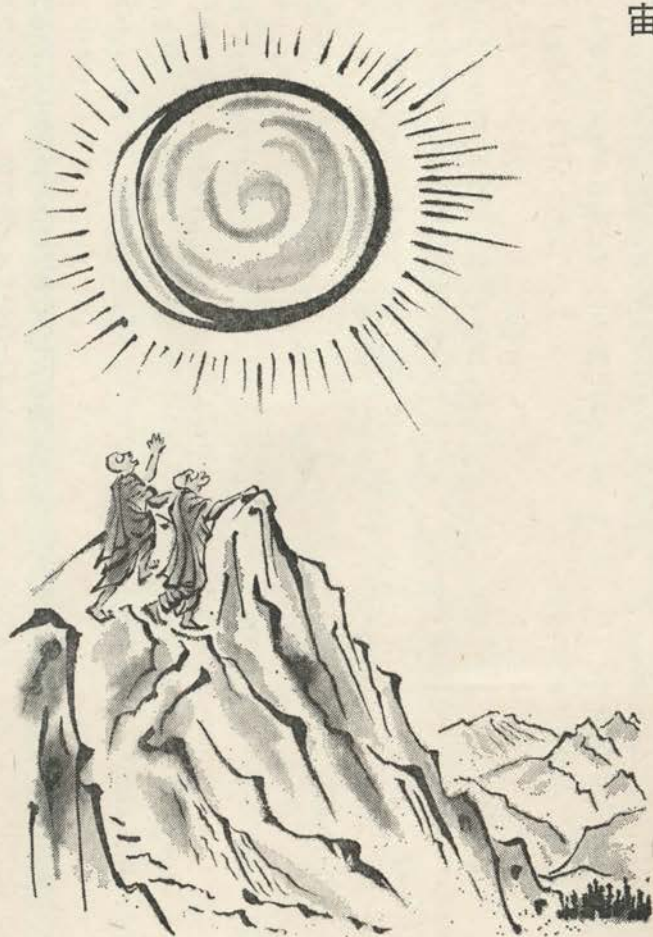
何かを思いつき、先に立つて仏塔を出た。

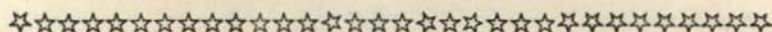
摩崖の外壁を頂上の方へ登りはじめた。

そこは登つてはならない聖域だった。当然のこと、巖頭は内部に仏陀像を蔵していたからである。しかし仏塔の頭目マトナ阿闍梨が先達となつているのだから、禁制は通じないはずである。



宇
宙





道なき外壁をよじ登って、二人は頂点にたどりついた。

風が強かった。到底立っていることはできなかった。二人は岩角にしがみついて、這いつくばる姿勢で四囲を見まわした。

「見よ、サビヤよ。あの太陽を」

「はい」

目くらむ強烈な光りで、太陽の輪郭などとらえることはできない。

「あそこに阿弥陀仏がいますのだ」

「太陽が阿弥陀仏——」

「いや違う。太陽ではない。太陽もまた阿弥陀仏の慈悲を受ける一個の生命にすぎない」

「さらに巨きいのですか、阿弥陀仏は？」

「そうだ。その仏身の高さは六十万億、那由他恒河沙由旬だという。眉間の白毫はスメル山（須弥山）の五つ分だという」

六十万億に乗ずるに那由他は一千億の数単位だから、これを掛け算したものだ。さらにそれへ恒河沙由旬、ガンジス河の砂粒をすべ

て掻き集め十五キロ弱敷きつめたものの一千億倍を乗じた身長なのである。

いったいこの途方もない数字は何事であろうか。ただの「無限」を表象したものであらうか。

それを解析する能力は、サビヤたちにはなかったはずだ。二十世紀も終わろうとする現代の天文学が、ようやくこれを解析する。

宇宙創成の想像そのものである。巨大な宇宙雲が大爆発を起こし、やがて水素のおだやかな雲となった。水素雲のなかでは巨大な銀河が形成され、それぞれの銀河のなかで次々とおびただしい数の星が誕生する。太陽はその一個にすぎず、そこでまた爆発が起こって地球などの惑星が発生した。

つまり阿弥陀仏の仏身とは、この巨大な銀河を言いあてている。

ちなみに太陽の惑星にすぎなかった地球上に、さまざまな微粒子に似た生命が誕生する。人間の生命もまたその一個にすぎない。

ところが銀河を造った巨大な宇宙雲にし
ろ、おびただしい数の星にしろ、その惑星た
る地球にしろ、いやさらに微細な人間の生命
にしろ、どれも同じ質のエネルギーを保有し
ている、と物理学は相対性原理を機軸にして
断定したのである。

その同じ質のエネルギーとは何か。集合し
てゆこうとするもの、分裂してゆこうとする
エネルギーだ。人間の生命だけではない。眼
に見えない原子核までが同じエネルギーを保
有していたのだ。原子核の分裂するエネルギ
ーを誘発させたのが原子爆弾だったことは言
うまでもない。

さて人間の生命にひそむ集合してゆこうと
するエネルギーを善——仏性に置きかえれ
ば、当然分裂する本能は根本的悪であろう。

阿弥陀仏の「真身」を、宇宙銀河とし、地
球上の微粒子を人間の生命ととらえ、そこに
「救い」を発見した浄土思想。物質をとこと
ん追いつめて現代物理学と全く合致した線上

で生命の本質をとらえていることにはならな
いであろうか。

誰が、どこで、何から、二千年も昔にこん
なことを知悉してしまったのか。

「サビヤよ、見よ」

中天をふり仰ぐ少年に、マトナ師は足もと
を指さして注意をうながした。

「誰かが仏塔の方へ登ってきます」

「誰かではないぞ。悪が接近している。悪の
集団がやってきた」

そのとおりだった。数十人の青衣の男ども
が白刃をぎらつかせながら大座仏塔を目ざし
て登ってくるではないか。

「朱駒波の城兵たちです」

「うむ。どうして道が知れたのであろう」

サビヤは突差に乳母カウナウジを思いう
かべていた。城内へ様子を見てくると帰った
が、そんな甘い見とおしは許されなかったよ
うである。

二十

朱駒波の城兵は大崖仏塔の入口へ到達した。先頭に立つ青衣の大男は、まぎれもなく訶利多種王であった。サビヤがそれを告げると、マトナ阿闍梨は、

「王妃を追ってきたな」

と事態を適確に読み抜いた。

「乳母が城内へ戻りましたから、それをとらえて……」

大崖仏塔への道を吐かせたのであろう。乳母カウナウジの姿はない。すでに殺されたか、城内に封じこめられたにちがいない。

「王妃は、どこにいる？」

マトナ師は訊いた。

「……」

告げたものかどうか、少年は迷った。

「急いで別な場所へ移さないと危険だぞ。青衣の鬼はすでに知っているはずだ。その乳母

とやらが口を割っている」

言われてみれば、そのとおりだった。

「北壁の洞窟にいます」

「タバス尊者も一緒なのか」

「はい」

「サビヤよ。すぐに走れ。そこから駅路の方へ連れおろすのだ」

「駅路のどこに？」

「そうだな……池のほとりに夜叉霊樹の森がある。あの奥へ匿せ。わたしは仏塔へ降りてゆく。訶利多種王と掛け合って、何とか時間を稼ごう」

駅路は東西をつなぐ隊商たちが通る街道である。青みどろの大池をめぐってゆくが、そこから北方、大雪山へ登る山裾はいちめんの樹林だった。夜叉霊樹は常緑樹で、厳冬の降雪時にもいつこうにめげることはなく、ふりつもった雪を風が立つたびに身をゆさぶって払い落とす。その姿が夜叉に見えた。

未だ降雪はなく、樹林は厚い葉におおわれ

て、たしかに恰好な潜伏場所かもしれないかった。

兩人はそれぞれの道を求めて、摩崖の頂上からおりていった。

少年サビヤから夜叉樹林への移動を聞かされたとき、タバス尊者は長いまつ毛を伏せて沈思した。やがて言った。

「三人が行動を共にすることは危い。夜叉樹林へゆくのは、わしだけにしておこう」

「王妃を此処へ？」

「むしろ此処では危い。もっと下方に幾つか洞がある。とりあえずサビヤよ。その一つに王妃を案内せよ」

「ではマトナ阿闍梨は……」

「疑ぐるわけではないが、人間は弱いものだ。いざというとき我が身を可愛がりたがる。仏塔を護るためには少々の犠牲はやむを得ないとか、仏法と王妃の身とどちらが大切であるか。また感情の底でわしの影も見逃し得ない種子となる」

「尊者を感情的に……」

「そうだとも。旅から仏塔へ帰着していながら姿を現さないのは、教団への裏切りではないか。処分を受けても当然だ。しかもわしが青衣の鬼の手で処分されたら、マトナは名実ともにこの仏塔の頭首となるし、また教団を救った功績も讃えられる」

「おのれ一身のために尊者の身を売るということですね」

「あり得ないことではない。また、それはそれで許されるだろうが、困るのはそんなだましがまかり通ると、教団の未来がおかしなことになる。権力の争奪が習性となる。争奪のためには手段をえらばず、だまし合いをやりはじめ」

「まさか、そこまでマトナ阿闍梨の心が汚かれるとは思えませんか」

「わしもそう思っている。そう願っている。しかしサビヤよ。ここは試してみることが必要がある。わしは一人、夜叉樹林へゆこう。お前

の王妃は下の洞で、しばらく様子をみるがいい」

北壁をおりる道は難渋をきわめた。いや、道なぞないのである。切り立った岩壁を、わずかな瘤にすがりながら、滑り落ち、しがみつぎ、また滑り落ちる、これのくり返しだった。

タバス尊者は老体とは思えぬ俊敏さがこの難行をこなしていったが、駱駝夫人はそうはいかない。当初は手を引いてみたが落下が余りにも急なので、サビヤは夫人の身体を丸ごと抱えこまねばならなかった。二人は一個の肉塊となって岩壁を滑り落ちてゆく。

サビヤは、この危険な状況のなかで、甘美な感触を楽しんでいる自分に気づいて、驚いた。駱駝夫人の柔らかな肉体を感じることができた。甘い体臭にむせて酔った。

辛らくもかたわらを通過してゆこうとする岩瘤にすがりついて、片腕をそれに巻きつけて落下を制止させた。王妃はただ闇雲にサビ

ヤの腰にしがみついているだけである。頬と頬とが触れ合わんばかりになった。

岩瘤に支えられて、ひと息入れたとき、サビヤは奇妙な言葉を思い浮かべていた。およそこの状況にはふさわしくない言葉だったであらう。

——共犯者。

つまり自分と王妃はいま極悪の罪を犯そうとしている共犯者なのである。必ずしも二人の身体が密着した危険な体位を意味しているのではない。

共犯者である極悪人たちは、こうして悪を楽しみながら倫落の底へ落下してゆくのであらう。生命なぞかえりみず、快楽だけを追求するのであらう。

そんなおのれたちの姿に気づかぬままで、人生を終ろうとする。死が迫ってくる。

罪のつぐないを、いつ何処でするのか。死後の世界でしか果たし得ない。死ねば、すべてが終り、ということにはなるまい。

つぐなう場所は地獄であろう。

以前、仏塔内で先輩から聞いた話だが、夫を裏切った妻とその情夫が地獄へおちた。情夫の男根は熱火にかざされ火ぶくれになった。指をふれただけでも激痛が身体の芯をつらぬく。姦婦の陰門も焼けた鉄棒をさしこまれ、内部はただれきってしまった。しかも二人は鬼どもにかこまれ、交合することを強制された。鬼どもは欲情を刺激するためのあらゆる手段を講じた。二人の身体は欲情でおおわれ、ひしと抱き合い、生前楽しんだ肉の饗宴をむさぼろうとするのだが、それは激痛以外の何ものでもなかった。「どうした、早くやれ」「お前たちが秘密で楽しみぬいてきたことではないか」と鬼どもはハヤシたてる。

下品下生。

どんなに飾りたてても人間の根源には、こうした悪へ魅かれてゆく本性があるのだ。善を志向する仏性と同質同量で。

そんな人間は、どうしたらいいのか。罪に

泥塗られたまま死んでゆかねばならない下品下生の人間は……叫ぶしかない。「ああ、仏よ、お助け下さい」

このときサビヤの耳もとで、現実の声がささやいてきた。

「早く来いと下で尊者が呼んでいますわ」

駱駝夫人が不安げにうながす。

「ああ……疲れませんか」

サビヤははっとなって王妃の肩を抱き寄せなおした。

「大丈夫よ。ちっとも疲れないわ」

「こわくはありませんか」

「こわくなんか全然ないわ。こうしてあなたに抱かれているんですもの」

ああ、この王妃もいま、自分と同じように下品下生の門をさまよっているのだ、とサビヤは思った。

北壁を三分の二ほど下りおえたところに、太い落葉樹の幹が大蛇のように横たわっていた。上へ伸びる力を失って這いずりながら生

育してしまつたのだ。

「この下側に洞窟があるはずだ」

タバス尊者は枝で身を支えながら、幹の底部を覗きこんだ。ただし、砂でおおわれていて、それらしい入口は見あたらなかった。サビヤは砂を掻き分けはじめた。

手ごたえのなかった砂の堆積が、ある深さへ達したとき、すくと脱落するように穴をうがった。奥はかなりの広さを持つ洞窟、しかし光りは全くさしこまない。

「王妃よ。しばらく此処で嵐が吹きすぎるのを待たれるがよい。わしも沙漠の穴倉で、禿鷹とハリネズミと一緒に暮したことがあった」

とあの体験を語って聞かせた。青衣の鬼、訶利多種王の暴虐は、黒い竜巻にまさるとも劣らなかつたかもしれない。

語りおえるとタバス尊者は駅路目ざして、残りの崖道をおりていった。

二十一

お互いの顔かたちもとらえがたい闇の底に少年サビヤと駱駝夫人は息を殺して坐りこんだ。石塊（いしくれ）と枝でふさいだ入口の気配だけに全神経を集中した。朱駒波城の追手が接近して来はすまいか。

やがて、入口の落葉樹をゆさぶって走る風の音が聞こえてきた。石塊が断崖を落下してゆく凄さまじい響き……この疾風では誰も北壁へは近づけまい。

「タバス尊者は、禿鷹とハリネズミと砂穴で一夜を明かして黒颯（カラブライン）を避けたそうですが、王妃、どちらが人間で、どちらが禿鷹たちでしょうかね」

サビヤは気軽に調子で話かけた。この闇の重苦しい沈黙がやりきれなくなつたのだ。

「それは、妾が禿鷹かハリネズミにきまつていますわ」

王妃の答える声も明るかった。

「どうして？」

「だってもともと駱駝なんですよの」

二人は笑いを交錯させた。でも笑い合ったあと、すぐに言葉がとぎれた。再び重たい沈黙へ落ちこんだ。

お互いの息づかいだけを肌で感ずる。その息づかいこそは、男と女の肉体を想いえがかせてしまう。すくなくともサビヤは北壁を滑りおりてきたときの王妃のやわらかな太い腕や胸の感触をよみがえらせていた。

「サビヤよ。妾は死ぬ前に一度だけ……」

駱駝夫人が沈黙を破った。

「一度だけ、何ですか」

「もう一度だけ石壁の仏さまを拝がみたい。拝がんでから死にたい」

「ああ……」

サビヤはほっとする。王妃は故郷バーンミヤーンの大石仏のことを言っているのだ。

「死んだ姉もそう言っていましたけど、いま

妾も」

「巨大な人間の形をした石仏だそうですね」

「誰もかもを、あの胸のなかへ吸いこんでしまいたい、眺めているだけで気が豊かになるお像ですわ」

「お像ねえ」

象徴化された法輪や菩提樹などの図柄しか礼拝したことのないサビヤには、この人間像の仏は見はてぬ夢であった。

あとになってサビヤは、その經典で書きしためている。

宇宙創成の大銀河。この生命体の根源である阿弥陀仏の無限な巨容は人間の視力ではとらえきれない。その理解力を超えている。

でもこの阿弥陀仏は、人間を必ず救うという誓いをたてた仏である。そのお姿を観たいという人間の願いにこたえないはずはない。

視界におさめ得るお姿で必ず我らの前へ現れてくる。一丈六尺、または八尺の微小なお姿となつて。

「観無量寿經」の第十三観——仏身の眞の姿を普遍化し、大衆が観想でき易くするための「雑想観」である。

この観想が添えられたために、後世の仏教徒たちは阿弥陀仏の眞身が何であつたかを理解できるようにしたのであるまいか。

宇宙創成の大銀河。そこから星が、惑星が、惑星の一つにすぎない地球が誕生した。さらにその地球上でこれまた微粒子の一つにすぎない人間の生命が生まれ出てきたのである。

だから宇宙創成の根源を、我が生命と直結すると説く浄土教は、その微粒子たちの世界に即応したミニチュア化の仏像をきざんで祈り礼拝する実践を選択したのである。

もちろん、この經典を作成した時点で、作者にそんな物理学の知識があつたとは思えない。幾点かのズレや誤まりのあることは当然である。

ただ一点だけ、鋭く我らの思考を刺しつら

ぬいてくるものは、あらゆる生命が本来保有しているその機能である。

宇宙創成の大銀河も大爆発によって発生した。星も惑星も、惑星の一つにすぎない地球も、どれもが爆発する分裂の機能を保有している。微粒子の一個である人間の生命もまた同じであろう。

ただし、これらの生命体は、分裂だけの機能で満たされているわけではない。星や惑星がバランスをたもって生きながらえているように、分裂の機能と同質同量で集合の機能も保有しているということだ。団結と言ひ直してもいい。

人間だけに限って考えても集合、団結しようとする本性と、分裂、爆発してゆこうとする実体とが、つねに共存しているのである。

それを善意——仏性と言いかえられるか。あるいは悪意——魔性ともなるであらうか。

話を現実の石窟へ戻さねばならない。
少年サビヤは闇のなかで立ちあがつた。

「此処で、このままじっとして置いて下さい。」

私は仏塔の様子をみてまいります」

「妾ひとりで此処に」

駱駝夫人は不安げに言葉をかえした。

「城兵たちの動きを探ぐってきます。それに

食べ物も運んで来なければなりません」

「サビヤ、大丈夫ですか」

「ご心配なく。この周辺なら何処だって動き

まわれます。ただ貴女だけは絶対に一步もこ

こから出てはなりません」

サビヤは石塊や枝を掻きのけて、入口から

這い出した。すでに、頭上にあった太陽はだ

いぶ西に傾いていた。あれからの時間の経過

がわかる。

再び入口をふさぐと、サビヤはさつき滑り

おりた北壁をよじ登っていった。身を隠くし

されるだけの岩瘤へたどりつき、そこから眼

下の駅路を見とおした。

「あっ……」

思わず少年の唇から叫び声が洩れた。

人馬の群れが駅路を走っている。まぎれも

なく青衣の鬼ども、朱駒波城の追手たちだ。

しかも駅路を北折して、夜叉樹林がある大雪

山の山裾を指向しているではないか。

「阿闍梨、あなたは……」

口惜しげな声が、叫びのあとを追いかけた。

タバス尊者が読んだとおり、マトナ阿闍梨

は裏切ったのだ。北壁の洞窟から逃げのびる

先へ城兵を誘ったのだ。

いや。まだ断定はできない。大崖仏塔がど

うなっているか。マトナ阿闍梨の身辺に何が

起こったか。それを確認しなければ、裏切り

ときめるわけにはいかないであろう。

サビヤは歩度を速め、急斜面を駆け登るよ

うにして仏塔を目ざした。

途中、タバス尊者の棲み家だった洞窟を覗

いた。そこは荒らされた気配は全くなかつ

た。つまり阿利多種王以下の城兵たちは、そ

んな洞窟には見向きもしなかつたことにな

る。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』正月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八二―八七

新年賀謹

埼玉工業大学

松川 文豪

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見 達人

〒174 東京都板橋区前野町五一四一一

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田 祐規

〒862 熊本市九品寺三一一一一

学校法人 芝学園

理事長

豊岡 益人

学校長

徳久 鐵郎

東山学園長

石井 俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五一

上宮 学園

理事長・学園長

鶴飼 隆玄

高等学校長 鶴飼 光順

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一六

神田寺（旧法禪寺・安良寺）

学校 法人 真理学園・神田寺幼稚園

友松 諦道

〒111 東京都千代田区外神田三一四一一
電話（〇三）二五一八六八三〇五

法然上人降誕聖地

美作 誕生 寺

岡山県久米郡久米南町

電話（〇八六七）八一二一〇二

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤 密雄

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

大原山 西福寺

鶴飼 隆玄

萩市 常念寺

老隠 古本 超然

寺内 大吉

新年賀謹

浄土宗宗議會議員

伊 東 康 雄

龍泉寺住職

本山光明寺執事長
西念寺住職

北 邨 謙 順

〒250-01 南足柄市沼田三一五

回向院住職

本 多 清 敏

〒130 東京都墨田区両国二八一〇

稲 田 稔 界

おてらはみなさんのそうだしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄 心 寺

小 池 政 雄

称名寺住職

須 藤 隆 仙

〒140 函館市船見町一八一四
電話(〇一三八)二六―五二二五

中 島 真 哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

教安寺住職

野 呂 幸 進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二
電話(〇四四)二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清 岸 寺

原 口 徳 正

松庵寺内無為窟主

小 川 金 英

〒105 花巻市双葉町六一四
仏教福祉センターよるひる銀行

〒130 青森市本町一―一―二二

正覚寺住職

楠 美 知 行

光運寺住職

飯 田 信 弘

〒510 四日市市中部三―一二

新年賀謹

法然上人二十五靈場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院貫主 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二一三一八
〒113 東京都文京区本郷一八一三 昌清寺 住職 服部光順 電話(〇三)八一三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一三九八 浄運寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二一四 電話(〇二八)二二一〇八〇二	芳泉寺 なぎ しん じゅん 柳 楽 真 純 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七四八	浄土宗教学局長 大田秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七)三二三四〇〇	〒440 豊橋市関屋町二二一 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三)五二一五五六六

謹賀新年

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―一二四七 廣隆寺内	晴雲寺住職 塚田弘尊 〒254 平塚市立野町六一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二一五一
お骨仏の寺 一心寺 貫主 高口恭行 〒543 大阪府天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七一―〇三七二(代)	摂取院住職 聖徳保育園長 金子貫達 〒850 長崎市銭座町四―五九 聖徳寺中	浄土宗議會議員 光明寺住職 山口諦存 〒673 明石市鍛冶屋町五―二〇	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	大松寺 〒108 東京都港区三田四―一―三八	浄土宗東京事務所長 鯨淵正浩 〒320 宇都宮市堀田二―五―一 浄鏡寺

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十一巻 正月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年十二月二十五日 印刷
昭和六十年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒102 振替東京八―八二―一八七番

新年賀謹

総本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 一田善寿

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巣鴨三―二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一―代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―二二四―代表
通信教育部 四九一―〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―三―七

京都文教短期大学

学長 大橋 俊 有

〒611 宇治市槇島町八〇